

日本分析化学会北海道支部の益々のご発展を祈って

鎌滝 哲也

日本分析化学会北海道支部は発足以来 50 周年にもなるとのこと、誠におめでたいことと思います。また、50 周年記念誌に投稿させていただいて光栄に思います。

私は北大に来るまでは分析化学とは無縁な世界にいたと思っておりましたが、今になってみると、分析化学の先生方とはあながち無縁ではなかったように思えてきました。私の前任の木村道也先生は北大にご赴任になる前は千葉大学の薬学部で講師をされていたようです。そのせいか、千葉大学の先輩方（藤間先生、小尾先生、神力先生など）をたくさん引き連れて来られました。私は千葉大学薬学部の出身で、慶応大学医学部を経て北大に来ました。千葉大学では分析の坂口教授から何度も（おそらく 3~4 回も）「私の研究室で一緒に研究しないか」とお誘いを頂きましたが、私は「生き物を使った研究をしたいから...」と言ってお断りしておりました。それが、よりもよって薬品分析化学講座の教授になってしまったのですから、笑い話にもなりません。北大に着任した後のある時、坂口先生にバツバツお会いしてしまいました。私はバツが悪くて「先生、ごめんなさい」と心から謝りました。坂口先生は「人の運命は分からないもの。教授就任おめでとう」と仰って下さいました。

理学部の吉田教授が私の教授室に訪問されたのは、私が北大の薬品分析化学講座の教授に就任してまだ数日目の事だったと思います。突然アポイントの電話があり、何のことか全く分からずお会いしたのです。後に知った吉田先生のニックネーム「元帥」に違わず、堂々とした、貫禄のある風貌の先生に見えました。新米教授で、それも就任したばかりの私に、吉田先生は「鎌滝先生、先生のご専門が分析でないことは承知しております。それでも、先生は分析の教授になられたのですから、是非に日本分析化学会の会員になって下さい」と、それはそれは丁寧に仰るのです。これが分析化学会との関わりのきっかけでした。自宅から大学への道順も分からないうちに、分析化学会へと誘導されたのです。私を上手く乗せたのは吉田先生ばかりではなく、多賀先生、藤本先生などたくさん居られました。これらの先生方のご努力下、北海道支部はとてつもない大発展を遂げておりました。たくさんのお本を出版し、全国に発信しておりました。お陰で支部の財政も豊かでした。

北海道支部の活動は、私が今までに経験したことのないものでした。悪く言えば、「人使いの荒い学会（支部）」と言えましょう。数年目には冬期研究発表会の開催を任せられました。私は余り状況が分からなかったし、助教授だった三浦先生は何でも上手にやる才能をお持ちでしたから、詳細は完全に任せて、私自身は製薬会社の札幌支店などをお願いして回り、資金を集めました。幸い、製薬会社のご協力で資金は潤沢になり、多少の余剰金が出来たほどでした。三浦先生と製薬企業各社には感謝・感謝です。数年して、今度は北海道支部長を仰せつかりました。順番とはいえ、右も左も分からない私に支部長とは過酷な任務と言えるでしょう。この時の助教授は北田先生でした。北田先生に丸投げして、私は具体的な「業務」は何もやりませんが、それでも代理の効かない用務はあります。名前は忘れてしまいましたが、函館で開催された学会では挨拶をしなくてはならず、それで家内

と車でドライブ、帰りには松前などに立ち寄って遊んできました。また、支部長の仕事の一つとして、高校の化学の先生に講演するという「任務」もありました。高校の化学の先生に分析化学の面白さを感じてもらい、将来分析化学を目指す若い人を増やそうという企画だったはずですが、ところが、私はといえば、もともと分析プロパーではありませんから、「分析化学の面白さ」など喋れるはずありません。それで、雑談風に「遺伝子と薬の効き目」のような話をしました。分析化学会の講演としては例外中の例外になってしまいましたが、高校の先生方はたくさんの質問をして下さいましたから、「終わりよければ全て良し」としておきましょう。

分析化学会北海道支部にかかわる楽しい思い出はたくさんあります。最後に工学部の渡辺先生との思い出を書いてみたいと思います。渡辺先生は博識で、話題も豊富でした。渡辺先生がなじみにしていた、カラオケのないスナックに足を運んでは様々なお喋りをしました。私が工学部で講義をしたり、先生に薬学部の講義をお願いしたこともありました。このように渡辺先生と親しくおつきあいできたのは、支部で発行した本「膜と界面」の編集会議からでした。私が遺伝子関係の研究をしていると聞きつけた渡辺先生は、「鎌滝を編集委員の一人に」とご提案してくださったようです。この本が生まれるまでには、何度も何度も編集会議が持たれました。編集には渡辺先生だけでなく、後に東大に転任された梅沢先生など蒼々たるメンバーが居られました。私が編集会議に出るようになって本の構成が変わったかどうかは良く覚えておりません。何もお役に立てなかったのではないかと思います。でも、私の方は編集会議に参加させていただいて、非常に勉強になりました。

北海道支部の先生方は常に前向きで、懐の深い先生方でした。お陰で北大在任 20 年間を楽しく過ごすことが出来ました。改めて心からお礼を申し上げたいと思います。

高崎より

(高崎健康福祉大学薬学部)

(北海道大学名誉教授)